



自然博物館は、全国に先駆けて、無料でブナの森を案内するという画期的な構想のもと、山形県の自然を想う心と、自然を愛する県民性に育まれながら25年目を迎えました。県民はもとより全国から多くの老若男女、ブナ愛好者、自然大好き人が訪れては、多様なブナの森の魅力に惹きつけられています。

この記念する年に、多様性豊かなブナの森にふさわしい、元隠花植物写真家で現在は「糞土師」としてうんこと野糞をテーマに、執筆活動と日本中を講演で飛び回られている伊沢正名氏をお招きして、「うんこはご馳走」～うんこで巡る生態系の循環～と題して講演と観察会を開催しました。

うんこと聞いただけで嫌悪感を露わにする人もいるでしょう。また、うんこはごちそうと聞けば何の事だかわからない人もいます。うんこは一般的に汚い臭いものとされ、現在の世間ではタブー視されている傾向があると考えられます。しかし、伊沢さんは「全ての生き物は食べてうんこをしているはず。この視点で生態系を見直してみると、食とうんこを巡る生態系の循環が分かる」と、菌類がうんこを分解していく様子を撮ったスライドを見ながら話をしてくださいました。生きる基本は食べて排泄すること。動物だけではなく、植物も菌類も生き物であれば、生きるための栄養を得なければならず、食は活動するエネルギーを得るための命の源。そして、不要になったカスはうんことして排泄されなければ生きてはいけません。食べて排泄するのは、すべての生き物の基本だということです。

菌類は動植物の死骸やうんこを食べて、CO₂や土中の養分になるうんこを出します。植物は、菌類のうんこを食べて有機物を作り酸素のうんこを出します。そして、動物は、植物とそのうんこを食べて、菌類の食べ物であるうんこを出すのです（上図参照）。つまり、うんこは自分にとっては不要なカスですが、他の生き物にとっては無くてはならない大切なご馳走となるわけです。これこそが、うんこがご馳走と呼ばれる生態系の循環であり、一切無駄のない理想的なシステムなのです。この三つの共同生活が生命の歴史を築いてきたこと、私たち人間もその生態系の一環であることを自覚しなければなりません。伊沢さんの生活と講話は、自然界の法則から逸脱しかけている人間に一石を投じるものでした。